

## 緒 言

田中 靖政

20世紀最後の年、西暦2000年は、朝鮮半島の政治的、社会的環境に大きな変化が起きた年である。思いがけない南北朝鮮最高指導者の友好親善の交互行為によって、南北朝鮮の政治・軍事・外交関係が新たなエポックに入ったことが世紀の重大メッセージとして全世界に向けて発信された。このメッセージは、1950年来の朝鮮半島の緊張関係が一つの節目にさしかかり、南北の和解と融合が単なる空想ではないことを強く内外に示唆するものであった。オリンピックでは、全朝鮮半島を代表して南北朝鮮の合同選手団が朝鮮半島旗を翳して出場し、南北朝鮮の一体感を世界に印象づけた。

南北朝鮮の関係の変化ほど劇的ではないにしろ、日本と韓国との関係にも変化が現れている。韓国では、1998年以降、それまで許可されなかった日本語の映画や歌謡曲などが解禁され、同年、日韓合作の「愛の黙示録」が上映されたほか、日本映画としては初めて北野武監督の「HANA-BI」が劇場公開された。2002年には、日本は韓国とサッカーのワールドカップを共催する。多くの日本人が、釜山、大邱、仁川など韓国の開催都市を訪れるであろうし、また多くの韓国人が日本の開催都市を訪れることになるであろう。韓国は仁川に新国際空港を開港した。日本もまたワールドカップ開催期間には羽田国際空港の利用を拡大する計画を明らかにした。ワールドカップの日韓共催が象徴するように、21世紀の日本人は日本それ自体の政治と経済の抜本的変革を進捗させる一方で、これまた政治と経済において大きな変革を経験しつつある韓国との共生の路を探していかなければならない。日本と韓国の共生は、どちらの国にとっても単なる理念上の問題ではなく、具体的に対処しなければならない現実の問題である。

本報告は、1997年度と98年度の2年間にわたって行われた「政治文化の視点に基づく21世紀における日韓共生の構図」研究プロジェクトの主な成果を纏めたものである。この研究プロジェクトは、上記研究課題に関して、日本と韓国におけるアンケート調査結果の交差文化的比較分析を目的として計画され、実施されたものである。

日本におけるアンケート調査は1998年10月下旬、日本語の調査票を用いて行われ、合計449名の大学生（男性183名、女性266名）から有効回答が得られた。また韓国におけるアンケート調査は1998年10月下旬から11月上旬にかけて韓国語の調査票を用いて行われ、合計573名の大学生（男性276名、女性297名）から有効回答が得られた。調査票は最初に日本語版が作成され、日韓二カ国語に通ずる専門家によって日本語から韓国語に翻訳された。韓国での調査は東亜日報社の協力を得て行われた。なお、日韓データの電算処理は、別府庸子客員研究員によって行われた。

本報告の第1章では「調査方法と回答者属性」を記す。回答者属性には通常の「性別」「年齢」「学歴」「専門領域」等に加え、回答者の「平日のコミュニケーション行動」と「パソコンの使用状態」も併せて比較分析した。第2章「日韓関係」は3節からなり、第1節では「日韓関係に対する認知と関係発展に重要な事柄」を、第2節では「日韓関係のあり方についてのイメージ」を、

また第3節では「歴史認識」を取り上げ、それぞれ日韓間で比較分析を行った。第3章は「環境・エネルギー問題」に焦点を転じ、第1節では「地球温暖化」と「地球温暖化防止」に関する態度を、また第2節では「原子力」に関する知識を、それぞれ比較分析した。第4章では「原発・産業廃棄物問題」を取り上げ、いわゆる「NIMBY」症候群と「迷惑事象に対する社会的受容」に働く心理的要因を比較分析した。第5章「情報通信倫理観と価値観」では、いわゆる「IT社会」におけるインターネット利用に伴う行動規範の問題に焦点を当て、比較分析を行った。第6章においては、日本と韓国の「家族制度」を取り上げて「家族」に対する意識を比較分析するとともに、韓国学生における「同姓同本婚姻禁止」に対する態度の分析を行った。

次に、本研究プロジェクトの構成メンバーを示しておく。

#### 本学所属の研究員

- 田中 靖政 (代表研究員・法学部教授)
- 田中 伸英 (経済学部教授／途中から海外研修)
- 窪田 誠 (計算機センター専任講師)
- 城所 弘泰 (計算機センター助手)

#### 本学所属の協力者

- 林 雄介 (学習院大学東洋文化研究所助手・当時)
- 萩原 豪 (学習院大学大学院博士後期課程)

#### 外部からの客員研究員

- 別府 庸子 (姫路工業大学教授)
- 平野 浩 (明治学院大学助教授)
- 中尾 美知子 (岩手県立大学助教授)
- 田中 豊 (日本学術振興会特別研究員・当時)
- 尹 相参 (東亜日報東京支社長・逝去)

なお、東洋文化研究所の河かおる助手には、本報告の刊行に関わる細かい編集の仕事の大半を受けもってもらった。ここに感謝の意を表したい。また、研究の途中で、東亜日報東京支社長・尹相参氏が急逝された。生前のご協力を感謝するとともに、心からお悔やみを申し述べたい。

いま、分担部分の執筆とともに、この報告書全体の編集を終えることができ、ようやく肩の荷がおりた心境である。この報告書が日韓国における学者・研究者、あるいは実務家に対して何らかの知的刺激を提供しうるならば、研究員一同、それに優る喜びはない。他方、取り残された問題も決して少なくない。各方面からのご批判やご教示をいただければ幸甚である。

2001年3月 東2号館10階の研究室において。